

# アートマイル環太平洋環境ユースサミット 2012 報告

## Artmile Environment Education Youth Summit of Pacific Rim Countries in Indonesia

ジャパンアートマイル (JAM)

2012年12月23日～26日にインドネシアの環境教育NGO「Tunas Hijau」と共同で「アートマイル環太平洋環境ユースサミット」を開催した。日本からは8名の中高校生、インドネシアから100名の中高校生が参加して、テーマ「自分たちが未来の地球になにができるか」について議論し、未来に向けた環境宣言を共同発信した。また、4日間の活動を通して共に未来を創るアジアの仲間としての意識を高めた。

### 1. 背景と目的

地球温暖化が進行し、世界中で環境保全・自然エネルギーへの取り組みが行われている中、インドネシア第二の都市スラバヤ市(人口約300万人)では小中高の学校教育の現場で環境教育が浸透しており、環境に対する意識が非常に高い。

2011年に東日本大震災が起きた日本では、地震・津波などの自然災害に加え福島原発事故が深刻な二次災害を引き起こし、国民全体が災害対策やクリーンエネルギーに大きな関心を寄せている。

こうした現状を踏まえ、「自分たちが未来の地球になにができるのか」をテーマに「アートマイル環太平洋環境ユースサミット」をインドネシアの環境教育NGO「Tunas Hijau Indonesia」と共同で開催した。

アジアのユースが共に地球の未来について考え、議論し、未来に向けた環境提言を発信すること、また、アジアの同世代と相互理解を深め、アジアから世界のリーダーとしての自覚を持つ次世代の育成を図ることを目的として実施した。

本事業は、日本側は外務省・文部科学省の後援事業として、インドネシア側ではスラバヤ市の全面的な支援により実施した。

### 2. 派遣スケジュール 全体の流れ

JAMと共催団体であるTunas Hijauは、前年度から環境ユースサミット開催に向けて協議を進めてきた。日本側では7月の派遣ユース応募から事業実施に向けて具体的な動きが始まった。

以下は日本の派遣事業スケジュールである。

4-6月	Tunas Hijauと共同でサミット計画策定・実施準備
7-9月	・派遣ユース募集(7/1～9/10):都道府県政令市他主要都市等教育委員会、JAMホームページ・メーリングリスト、マスコミを通して募集
9月	・派遣ユース決定及び通知(9/20) ・発表協議用メーリングリスト・Skypeグループビデオ会議の立上げ
10月	・各自の小論文をユース全員で共有・意見交換 ・環境に関する資料の読み込み
11月	・発表テーマの決定、発表グループ分け ・発表原稿日本語版作成 ・文化交流の内容と担当者を決定
12月	・発表原稿英語版作成 ・発表用パワーポイント作成
	21: 関空発→タイ着(バンコク)
	22: タイで発表練習・リハーサル→インドネシアへ
	23: 地元ユース交流会、アートマイル参加校訪問 アートマイル壁画展&トークショー
	24: ユースサミットオープニング、文化交流
	25: ユースサミット本会議、サミット記念壁画制作
	26: エコスクール訪問、ユースサミットクロージング お別れ晩餐会
	27: インドネシア発→タイ着
	28: 市内視察、<帰路>タイ発
	29: 関空着

#### (1) 全国募集・派遣ユース決定

「アートマイル環太平洋環境ユースサミット」への派遣ユースの募集は、全国の都道府県・政令市他主要都市等教育委員会に募集案内を郵送して行った。

同時に、ホームページやメーリングリストなどインターネットを通して広く全国に募集した。応募条件として参加希望者にユースサミットのテーマ「自分たちは未来の地球になにができるのか」について日本語と英語の小論文の提出を求めた。

派遣ユースの選考に当たっては、大学准教授・ジャーナリスト・(独)国際協力機構職員・IT企業経営者・JAM事務局で構成する選考委員会において日本語と英語の小論文による審査を行い、8人の中学生・高校生を選考した。

## (2) インターネットによる発表内容協議

派遣ユースは北海道・埼玉県・千葉県・大阪府・兵庫県と離れた地域から参加していることからインターネットを使って発表内容の協議を行った。

メーリングリストで情報共有や意見交換を行いながら、10人が同時にビデオ会議をすることができる Skype の多地点接続サービスを利用して顔を合わせて協議を重ねた。

## (3) テーマ決め・発表グループ分け

各ユースは、まずそれぞれ全員の応募小論文を読み各人が環境について何に関心を持ち、どういう意見を持っているのかを共有し、日本チームとして次の3つのテーマで発表することを決定した。

- ア。「地球温暖化」
- イ。「東日本大震災」
- ウ。「経済発展と環境破壊」

東日本大震災については、自然災害も環境破壊の原因と位置付け、発表テーマの一つとした。

各ユースは発表テーマごとにグループに分かれ、チームリーダーを決め、チーム毎に発表原稿を作成することとした。

## (4) 発表原稿作成

発表原稿は、チーム毎にメーリングリストで内容を検討し、ビデオ会議で直接意見交換をして固めていった。定期的に行う全体会議で他チームの内容を共有し、日本チーム全体として充実したプレゼンになるように発表原稿を作成した。

JAM はユースに、内容が客観的な事実に基づいていることと未来に向けた自分たちの意見が入っていることを求めた。

今の自分にとって最高の発表をすることを目指して発表準備に取り組んだユースたちは、原稿作りを通して自信とそれぞれの課題を見つけたようだった。時間の制約もある中、自分と戦いながら、日本語版を作成、次いで英語版を作成、最後にパワーポイントで発表資料を作成した。



(地球温暖化のパワーポイント)

## (5) 文化交流の準備

発表原稿の作成と平行して文化交流の内容についても相談。日本らしい伝統的なものと今若者の間で流行しているものを両方やろうということになり、文化交流は、次の4点に決まった。それぞれにリーダーを決めて自分たちで準備をした。

- ア。日本の伝統的な盆踊り
- イ。AKB48の歌と踊り
- ウ。折り紙
- エ。書

## 3. タイで発表練習

ユースはそれまでビデオ会議で顔を合わせていたが実際に会うのは12月21日関西空港が初めて。

航空チケットの関係でタイ経由となり、22日の午前中はタイのホテルの会議室を借り切って発表の練習をした。入念に原稿をチェックし、「人に伝わるように」ということを意識してスピーチの練習を行った。



## 4. 地元ユースと交流&アートマイル校訪問

22日の夜にタイからスラバヤに移動した。23日は地元のユースと交流し、学校訪問を行った。

### (1) スラバヤ地元のユースと交流会

スラバヤの初日は市内の公園 Bratang Flora Park で地元のユースとの交流会。お互いの国の伝統的な遊びを教え合っているうちに緊張がほぐれ、ユースサミットに向けて良いスタートが切れた。



### (2) アートマイル参加校訪問

23日の午後は「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」参加校の2校を訪問。

#### <SMAN21 高校>

日本の高校生のユースは北海道の海星学院高校と交流している SMAN21 を訪問した。この高校では日本語の授業があり、校内のいろいろな場所に日本語で歓迎の言葉が貼られていた。音楽と踊りで温かい歓迎を受け、日本のユースもインドネシアの踊りを一緒に踊って友好を深めた。



#### <SMPN23 中学校>

中学生は兵庫県の芦屋国際中等教育学校と交流している SMPN23 を訪問した。芦屋国際中等教育学校の生徒が半分描いた2枚の壁画を持参し、自分たちが絵に込めたメッセージを説明して SMPN23 に壁画の完成を託した。



スラバヤでは環境教育 NGO Tunas Hijau が市内の学校に環境教育を普及させている。両校とも環境教育に非常に熱心に取り組んでおり、校内

のいたるところで生徒たちの日々のエコ活動の成果を見ることができた。ゴミ減少やリサイクル・リユースへの取り組みはもちろんのこと、温暖化防止に繋がる緑化にも力を入れており、校内で育てる植物も全て自分たちがゴミから作った堆肥で育てていた。

### 5. アートマイル壁画展とトークショー

スラバヤで最大のモール Grand City のイベント会場 Convention & Exhibition で12月23日ー1月6日に「アートマイル壁画展」を開催した。

展示作品は30点、その内20点は日本とインドネシアの学校が共同制作した作品、10点は日本と他の国々の学校が共同制作した作品。会場では展示期間中様々なイベントが催され、多くのスラバヤ市民が作品を鑑賞していた。

インドネシア最大の新聞社 Jawa Pos で大きく「アートマイル壁画展」が紹介された。



夜に会場の特設ステージでアートマイルのトークショーがあった。JAM 代表が「文化交流と環境教育」というテーマで、「学校の教育現場におけるアートマイルの国際協働学習は異文化理解だけでなく環境などグローバルなテーマの国際教育に効果がある」と話した。夜にもかかわらず多くの市民が集まり、熱心に話を聞いてくれた。





## 6. ユースサミット オープニング

24日の午前中はユースサミット会場でオープニングと文化交流を行い、午後は、各テーブルに分かれて環境ディスカッションを行った。

### (1) オープニングセレモニー

オープニングセレモニーの会場はスラバヤ市公館 Graha Sawunggaling の大ホール。在スラバヤ領事館から古賀俊行首席領事が主賓として出席され、祝辞をいただいた。

セレモニーには日本の使節団 14 人とインドネシアのユース 100 人と教師が参加した。当初予定していたマレーシアとオーストラリアの生徒は残念ながら参加できなかったが、シンガポールからは教師が参加した。



セレモニーでは2つの学校の舞踊団約 80 人が歓迎の踊りで日本の派遣団を迎えてくれた。驚いたことに彼らの衣装は全て不用になった紙・ビニール・プラスチック・ペットボトル・CD・紐・リボンなどで作ったリサイクル衣装だった。大変豪華な民族衣装に見えた衣装が実はリサイクル品で作られていたことに日本チームは驚いた。徹底したリサイクル・リユースの精神がここに生かされていると感じ、幅広い環境教育が浸透していることに感心した。



舞台での歓迎の踊りが終わると場面は会場に移

った。本物の民族衣装に身を包んだユースがインドネシアの伝統的な踊りを舞った後、日本のユースに踊りを教えてくれて一緒に踊った。



日本チームはインドネシアでも人気があるというAKB 48の「ヘビーローテーション」と「会いたかった」を披露した。AKBで会場は一気に盛り上がり、流行の音楽が国境を越えて若い人たちを一つにするということを目のあたりにした。



### (2) 文化交流

セレモニーの後の文化交流で日本チームは折り紙と盆踊りを披露した。

折り紙では、各テーブルに日本のユースが一人ずつ入ってインドネシアのユースに折り方を教えた。折り紙といえばよく文化交流に使われるため少々ありきたりかなと思っていたが、インドネシアのユースたちが大変興味を持って熱心に折り方を教わっていたのが印象的であった。



また、日本の文化紹介として浴衣姿で伝統的な盆踊りを披露した。過去に海外で盆踊りを教えた経験があるユースがリーダーとなってインドネシアのユースに盆踊りを教えた。浴衣姿の日本のユースとインドネシアのユースが輪になって踊り、お互いの伝統文化を共有した。





## 7. 環境ディスカッション

24日の午後はグループに分かれて環境についてディスカッションを行った。ミッションは二つ、一つはグループの環境スローガンを考えること、もう一つは環境についてのオリジナルソングを作ること。日本とインドネシアのユースたちは、スローガンやオリジナルソングの制作を通して、共にアジアの仲間として地球の未来について考え、議論した。



ここで感心したことは、インドネシアの中高生が議論することに慣れていて、出されたテーマについて自分の意見をはっきりと述べ、人の意見をしっかり聞き、質問をして相手の意見を正しく理解しようとする姿勢に感心した。グループの意見を一つにまとめる力、それをみんなの前でプレゼンする力も身につけていた。しかも言語は英語。どうしてこのような力がついているのか、引率している教師に尋ねると、英語は小学校1年から授業に入っており、高学年になると授業でディスカッションをすることが多くなる。中学になるとほとんどの教科でプレゼンをするということだった。日本でもこうしたディスカッション力、プレゼン力を付ける授業の実践が望まれる。課題は教師の力量か。

最後にグループ毎に話し合ったスローガンとオリジナルソングを全員の前で披露した。



## <Jawa Pos 訪問>

24日の夜、インドネシアで最大の新聞社 Jawa Pos に招待され、本社を訪問する機会に恵まれた。

日本の中高生がスラバヤを訪問してユースサミットを開催していることは地元で話題になっており、3日連続で新聞に掲載された。



## 8. ユースサミット 本会議

25日の午前中はユースサミットの本会議。日本から3つの発表、インドネシアから5つの発表があった。



日本のユースは過去の環境汚染や大災害を経験した国としてクリーンで災害に強い未来の地球の創造に向けて提言し、インドネシアのユースはそれぞれの学校のエコの取り組みについて発表した。発表の後には多くの質問が出て発表内容への理解を深め合い、自分たちの未来の地球に対する思いを共有した。

以下、日本の発表について紹介する。

### ① 地球温暖化

地球温暖化の原因と現状を説明し、独自の対策で効果を上げている国の取り組みを紹介、次いで日本の自分たちが実践していることを紹介、最後に自分たちが考えたユニークなアイデアを提案した。自分たち人間が起こした問題は自分たち人間が力を合わせて解決しようと訴えて締めくくった。





## ② 東日本大震災

東日本大震災の時に千葉県で液状化を体験したユースと、被災した釜石に行ってボランティアをしたユースが自らの体験を語った。

一人一人の力は小さいけれど、集めると大きな力になる、続けることで何かを変えることができる、一緒に地球を変えていきましょうと訴えた。



## ③ 経済発展と環境破壊

戦後急速な経済発展を遂げた日本が経済発展を優先したために公害病を起こしてしまった過去の失敗をこれから急速に経済発展していくインドネシアは繰り返さないで欲しいと訴えた。

自分たちが未来の地球のためにできることは、世界の人々と交流して相互理解を深めること、そして自国の経験を世界に「発信」して問題を共有すること、そうすれば発展した技術で解決できることがあるはずと訴えた。



## 9. ユースサミット記念環境壁画制作

25日の午後は日本とインドネシアのユースがスラバヤ市庁舎広場でユースサミット記念の環境壁画を共同制作した。

### (1) 環境壁画制作

壁画のテーマはユースサミットと同じく「自分たちが未来の地球になにができるのか」。

自分たちが環境のために実践していることや自

然が美しい地球を縦 1.5m 横 3.6m の大きなキャンバスいっぱい描いた。



壁画制作では、日本とインドネシアのユースが「自分たちが未来の地球になにができるのか」というテーマを共有して一緒に大きな作品を作り上げた。これは将来彼らが海外の同世代と協働して仕事をするときの原体験となるに違いない。

### (2) 屋外文化活動 竹トンボ・書

壁画制作と平行して、日本の伝統的な遊びである「竹トンボ」と伝統文化である「書」を紹介した。

<竹トンボ>

竹トンボは、JAM のメンバーから交流に役立てて欲しいと寄贈されたものを持参した。

竹トンボに好きな色を塗ったり、インドネシアのユースが日本のユースに頼んで好きな言葉を日本語で書いてもらったりして竹トンボがさらに友好を深める手段となった。



<書>

書は、日本で文化交流の相談をしていたときに、「私は書が得意です。書で交流したいです」と提案した二人が担当した。

インドネシアのユースたちは書に大変関心を持

ち、好きな言葉を日本語で書いて欲しいとリクエストした。日本のユースはそのリクエストに応じて次々と書を書き、日本語の意味を教えたりしてコミュニケーションが広がっていった。

書を担当したユースが「コミュニケーションのツールは言葉だけでないことを実感した」と言ったように、伝えたい内容があり、伝える手段を身につけていれば、様々な方法で意思疎通が図れることをユースたちは実感した。同時に、英語というコミュニケーションツールを身につけることの重要性を強く実感した。



また、キノコ小屋でジャンボキノコを栽培しており、収穫したキノコでキノコジュース、キノコアイスクリーム、キノコクッキーなどを作っていた。



#### <SMKN10 高校>



SMKN10 高校は非常にユニークなエコ活動を展開していた。それはリサイクルドレスによるファッションショー。手作りのリサイクルドレスを身にまとい、ステージで音楽に合わせて繰り広げるファッションショーは見事であった。

環境教育が知識だけに終わるのではなく、生きた活動として生徒が主体的に取り組んでいる様子がうかがえた。



#### 10. 2012年のエコスクール優勝校訪問

26日はスラバヤの2012年エコスクールコンテストで優勝した SMPN28 中学校と SMKN10 高校を訪問した。

どちらの学校も校内緑化や水の浄化などエコ活動に熱心に取り組み、リサイクル品からオーナメントや実用的な小物を作るなど Recycle、Reduce、Reuse 活動も熱心に実践している上に、独自のエコ活動を展開していた。

#### <SMPN28 中学校>



SMPN28 中学校には果樹園があり、生徒が生ゴミから堆肥を作って有機農法で何種類もの果樹を育てていた。採れた果物でジャムやお菓子を作って販売していた。



この学校でも有機農法で多くの木や野菜を育てており、校内にある大きな池では水の生き物も大切に育てていた。

日本のユースは、植樹や野菜の苗植え、コイの稚魚の放流など、彼らの日頃の活動を少し体験することで実践的な環境教育に触れることができた。





## 11. クロージングセレモニーと市長主催晩餐会

26 日夜にスラバヤ市長官邸でクロージングセレモニーと市長主催のお別れ晩餐会が催された。

### (1) クロージングセレモニー

クロージングセレモニーでは、スラバヤ市長から両国のユースに向けて今後の両国の友好の架け橋となることを期待しているとエールが送られた。

JAM からは市長と Tunas Hijau 代表にユースが心を込めて書いた書を贈った。市長には「愛」、Tunas Hijau には「縁」という言葉を贈った。



### <環境宣言発表>

日本とインドネシアのユースたちは 24 日の環境スローガンやオリジナルソングの共同制作、25 日の本会議での発表と壁画制作を通して未来の地球や環境について意見を交わした。

26 日に両国ユースの代表がそれまで共有したことをまとめて、インドネシア語と英語で「環境宣言」を作成した。

クロージングセレモニーで、日本のユース代表が英語で、インドネシアのユースはインドネシア語で「環境宣言」を発表した。



### <環境壁画お披露目>

最後に、ユースサミットの記念として両国のユースが共同制作した環境壁画「自分たちは未来の

地球になにができるのか」を披露した。



### (2) 市長主催お別れ晩餐会

市長主催の晩餐会は市長官邸で開催された。

濃密な 4 日間を共に過ごしたユースたちはすっかり仲良くなり、終始和やかで笑いが絶えない晩餐会となった。

市長が「みなさんでスラバヤの踊りを踊りましょう」と声をかけるとみんなが手を繋ぎ、肩



を抱き、輪になって、いつまでも踊りが続いた。

ユースたちはパーティーの終わりの時間になっても名残惜しくてその場を離れることができず、お互いに連絡を取り合うことを約束してようやく別れることができた。



## 12. 成果

ユースサミットの日本チームの発表は内容もプレゼンもすばらしかった。今回は個人の発表と違い、チームで原稿を作成し、チームでプレゼンをした。各自がチームの中の自分の役割を自覚して責任を果たした。リーダーはチームメンバーの意見を調整してまとめ、最終的に自分がやりきる覚悟を持って原稿もプレゼン資料も完成させた。

ユースサミットでグループ毎にディスカッションする場面では、インドネシアのユースたちは議論の仕方が身についており、英語で自分の意見を



はっきりと相手に伝え、人の意見をきちんと聞き、相手を正しく理解しようと質問をよくし、グループ内の意見を上手くまとめていた。それに比べると日本のユースは議論することに慣れておらず、英語力も十分ではないため初日は相当苦労していた。しかし、とてもフレンドリーなインドネシアのユースたちに助けられ、英語と格闘しながらも、積極的に自分でコミュニケーションをとれるようになっていった。

文化交流で日本側が披露した盆踊り、AKB48のパフォーマンス、折り紙、書、竹トンボは全て大成功だった。予想以上にインドネシアのユースが日本の文化に関心を持ち、一緒に楽しんで大いに盛り上がった。

短い滞在期間にも係わらず、連日様々な活動を通して、ユースたちは確実に相互理解を深め、自分たちは未来を一緒に作るアジアの仲間だという意識を持てたように思う。このユースの中から将来世界のリーダーとして活躍する人材が出ることを期待している。

「アートマイル環太平洋環境ユースサミット」の成果として参加したユースの感想文を紹介する。

#### <参加ユースAの感想文>

訪問前、私は発表原稿、日本語、英語、パワーポイントを作成するにあたってどれだけ正しい情報を得ることが重要なことであるかを学びました。

プレゼンテーションでは、言葉で気持ちを伝えるには、話すスピードやイントネーション、何よりも伝えたいという気持ちが大切だということがとてもよく分かりました。実際に練習していく中で、その難しさも心から感じました。しかし、ここまで原稿も頑張って作ってきたのだから諦めずに自分の納得出来る発表にしようと思いました。

プレゼンテーション本番の日は緊張しました。しかしその緊張はいつもの緊張とは違うものでした。緊張ではなく期待であったのかもしれない。日本語、英語の原稿、PowerPointの作成、どれも決して容易ではありませんでした。しかし自分で納得のいくまで試行錯誤し完成させた原稿を発表するからこそ、緊張が良いものに感じたのだと思います。今後あのような機会があれば英語で質問に答えられるようにしたいです。

インドネシア訪問とユースサミットを通して私は日本人である自分を「日本人」として客観的に見ることができました。他国からみて日本、日本人はどのように見られているのか、国と国の違い、新しい発見を多く見つけることができました。

それとは反対に情けなさも感じました。インドネシアの子は自国に誇りを持っていました。私は日本人であるのに日本の文化や習慣について答えられない時がありました。今までは自国を大切にしているつもりでしたが全くでした。本当に自国に誇りを持つということは、過去から現在までの自国を把握することだと分かりました。

長いようで短かった9日間でしたが得られたものは日本で過ごす9日間とは比べものにならないぐらい沢山あります。無駄にせずこれからのに活かします。

確かにインドネシアは日本よりは発展していません。水も日本の安全度に比べるとまだまだです。しかし環境に対する意識ははるかに日本を上回っています。経済が発展しているから先進国なのか、それは違うのではないかとこのサミットを通して思いました。

また今後同じアジアに位置する国として多くの関わりをもつだろうインドネシア、その他の国と協力していくには“自己主張”が日本には必要だと強く思いました。どんなに高い技術力を持っていても自分の意見を主張出来なければ意味がありません。だからこそ今私が出れることは自分の意見をしっかり表わす表現力や行動力だと思っています。そして英語力です。

次の時代を担うのは私達です。日本人の素晴らしさを活かし、世界の国々に必要とされる国に発展させるために、私達は努力しなくてはなりません。この経験をここで思い出として残すのではなく、これからのために使いたいと思います。